
御狐物語

紗刃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御狐物語

【Nコード】

N8000Y

【作者名】

紗刃

【あらすじ】

楔山の頂上には式匹の御狐夫婦が棲んでいた。山一帯を治める領主である和御堂、そしてそれを支える山の巫女、切灯乃。これは式匹の狐の、穏やかで暖かい物語である。

【巻】楔山の日常

太陽が東の空に昇り始めた頃、霞ヶ森に光が差し始めた。その上の楔山は木々達が朝日を浴びて輝き、生き物たちが動きだした。

楔山の頂上にある社の中では、既に朝餉の仕度が済まされていた。だが肝心の主はまだ眠っている。朝餉の用意をした者は日常となつた主起こしへと、彼の寝室へと出向く。寝室の戸を静かに開ければ、部屋に眩いばかりの朝日が入り込む。その者は微かに衣擦れの音を立てながら布団に近づき、彼の帳台の前に鎮座した。彼の銀髪は朝日に照らされて輝いている。

「朝で御座いますよ、和御堂様^{わみどう}」

そう言ってみるが、彼から返事は帰ってこない。その者は一つ溜息をつき、白金の髪を揺らしてもう一度言う。

「朝で御座いますよ、起きて下さい」

「…ん。朝か…お早う、切灯乃^{せつひの}」

「お早う御座います、和御堂様」

起きた彼は布団に入つたまま彼女に微笑み、彼女もまた微笑み返した。彼　和御堂がこの楔山の主である。そしてその隣にいるのが彼の妻、切灯乃である。彼は掛け布団を剥いで起き上がり、頭を掻く。そんな彼を見ながら切灯乃は話す。

「いつもの事ながら、既に朝餉の用意は整っております。後は…身支度を整えて広間に下さいね」

そついい切灯乃は立ち上がったが、和御堂に袖を強く掴まれ体制を

崩す。そしてそのまま和御堂の胸へすっぱり収まる形となってしまう。

「今日は少し寝足りないようだ」

「おふざけも対外にして下さい。朝餉が冷めてしまいます」

困惑した表情を浮かべる切灯乃だが、抵抗はしない。和御堂は悪戯っ子の様に青灰色の瞳を細めて微笑んだ。

「我^{わたし}と朝餉では朝餉の方を取るのか？」

「そういう訳ではありませんが」

「なら、寝るぞ」

「そういう訳にもいきません」

するりと腕の中から抜け出した切灯乃をつまらなそうな、また悲しそうな表情で見る和御堂。切灯乃はそれに眉尻を下げ、申し訳なさそうな表情になる。それを見た和御堂は苦笑して謝った。

「悪い悪い、少し悪ふざけが過ぎた様だ。だからそんな顔するな」

そして和御堂は「先に行つて待つていてくれ」と告げ立ち上がる。切灯乃はそれに頷き、部屋から出て行った。そしてそれを見送った和御堂は部屋で静かに呟いた。

「もう春も中旬か…」

和御堂が広間の戸を開けると既に切灯乃が座って待っていた。彼はゆっくりと彼女の隣に座り、箸を手にした。そして食べる前の一言を切灯乃が口にしたのを聞いてから、和御堂は食に手をつけた。

「雨期が近づいていますね」

「霞ヶ森の霞霧が深くなるな。こうなると、警戒した方が良いな」

切灯乃は黙ってそれに頷く。和御堂の言う警戒とは、雨期に森に人が迷い込まない様にする事である。毎年雨期には霞ヶ森の霧が深くなり、森に入る人はいない。だがごく稀に人が迷い込み、それ以降出られなくなった事もあるのだ。

「宇城多摩様も忙しくなるでしょう…何か手伝いたいのですが」
うぎたま

「そうはいうが、毎年気持ちだけで有難いと断られるだろう」

そう言われ切灯乃は言葉に詰まる。宇城多摩は和御堂の右腕としてこの楔山を支えている山狗だ。雨期の森の見回りは宇城多摩が任されていて、少数の仲間たちと行っているのだ。

「宇城多摩はお前を大事に思っているから危険な仕事は任せたくないのだ。それは分かっているだろう？」

「はい…ですが、仮にも私を育ててくれた母代わりの方ですので、何かお役に立てることはしたいのです」

「お前が笑っている事が、十分役に立っていると言っておったわ」

その言葉に照れ笑いして肩を竦める切灯乃。切灯乃は和御堂と宇城多摩に育てられたので、宇城多摩は切灯乃にとって母代わりの大切な人なのだ。

「失礼致します」

凜としたでも優しい声が戸の向こうで聞こえ、静かに戸が開く。明るい茶色の髪が光で輝きゆつくりと二人の前まで歩いてきたかと思うとその場で低頭する。二人はその者を見て微笑んだ。

「お早う御座います、宇城多摩様」

「お早う御座います、切灯乃、和御堂様」

「ああ、おはようさん」

その者こそ先程の話題の人物である宇城多摩だった。外見は二十代後半だが、実年齢は六百歳という山狗だ。宇城多摩は面を上げて微笑んだ。

「今日はどんな用だ、宇城多摩」

「わたしが此処に來た理由など存知ているのでしょうか？」

宇城多摩は苦笑して和御堂を見ると、くつくつと愉快そうに笑う。

「雨期の見回りのことだろう。今年はどうなるかのう…」
那岐白なぎしろ

「そのような手間をかけさせる事ではありませぬ。でもどうなる事でしょう…予想では、今年は二十五年ぶりの大雨となると」
「二十五年ぶり…か」

そっくり和御堂はふと隣の切灯乃の顔を見た。切灯乃はそれに気づき、懐かしそうに緋色の眸を細めた。

「もうそれほど経つのですね…私が拾われてから」

「ああ、月日が経つのは早いな。…雨期で大雨の日のことだったか」
宇城多摩は「そうですね」と頷き、視線を切灯乃へと向けた。切灯乃はこの楔山に二十五年前の雨期に捨てられていたのだ。大雨の中見回りをしていた宇城多摩に発見され、拾われたのだ。そして次に和御堂が育てると申し出た為、二人が切灯乃を育てた。そうしてもう二十五年の月日が経ったのだ。

「懐かしゅうございますね」

「あの頃の私など、ほんの小さな毛玉にすぎませぬよ」

「毛玉か。確かにあのときはまだ五歳の童子であつたからな」

「小さかったのう」と思い出し笑いをする和御堂に、「そうでございますね」と微笑む宇城多摩。切灯乃は少し恥ずかしそうにはにかんで微笑んだ。三人は昔話を数分話した後、自らの仕事をする為その場はお開きになった。太陽はまだ昇ったばかりで、里の鶏が高らかに声を上げていたのだった。

【貳】猫又の気象情報

切灯乃は生き物達の様子を見る為、楔山を歩き回っていた。楔山に棲む生き物達は切灯乃を見つけるとすぐに近寄り、「姫様」「姫様」と喜び笑顔になる。それを見た切灯乃は微笑み返し、様子を聞いたり雨期の注意を促したりするのが仕事だ。一段落着いたところで、切灯乃は川のほとりで休み、掌で水をすくって口にする。すると彼女の頭上から呑気そうな声が降ってきた。

「今日もお仕事ご苦労さん」

それを聞いた切灯乃は顔を上げて、微笑んで木の上を見上げる。そこには太い木の幹にごろんと寝転がって、眠たそうに欠伸をする猫又の住人。外見からして二十代前半。藍色の短い髪に眠たそうに半眼される湖色の瞳。

「ろんれい 崙黎、今起きた所ですか？」

「いんや、今日は早起き。珍しいだろ？」

崙黎はそういつて口端を吊り上げた。崙黎は楔山に棲む猫又で、いつからいたのか分からない、気付けば居付いていたという。切灯乃は崙黎を見上げ笑みを絶やさぬまま、石の上に腰かける。

「本当に珍しいですね。それで、今日も悪事をしてきて…？」

「酷いなあ、お前は。悪事じゃなくて悪戯と言ってほしいね」

「貴方の悪戯は過激すぎるのです」

切灯乃の言葉に崙黎は困ったように笑う。そう。切灯乃の言う通り崙黎の悪戯は過激すぎるのだ。

例えば大きな楠の葉で鬼の様な御面を作り、山に棲む生き物達を驚かし、更に追いかけて回して和御堂と宇城多摩に対処させるくらい的大事を起こした。また一丈程の面積の二条の深さはあるかという大穴を掘り落とし穴を作り、その中にはオナモミ、ヒナタイノコズチなどの大量のひつつき虫をいれて生き物達を落として出られなくなるなどして、宇城多摩の頭を抱えさせ説教を食らった。これを悪戯という可愛い呼び名で言える筈もなく、悪事と言わずになんと呼べばいいだろう。

その話から別な話に切り替えようと、崙黎は思案の表情になり数分経ったあと話を切り出した。

「そついや下の部落に棲む狸達がさ、何か森の様子が変だって言うてたぜ」

「え、森の…？」

崙黎の口から出た言葉に、切灯乃は真剣な表情で問う。崙黎はそれに黙って頷き返す。

「ああ。今年は二十五年振りの大雨になるって話だろ？」

「ええ、そうみたいです」

「それでだ。最近はやけに地震が多い。しかも森は強固なものではない。…続きは分かるな？」

「土砂崩れ、ですか」

切灯乃はそう言って唇を噛み締め顔に苦渋の色を現した。崙黎は「ああ」と頷きと目を細めた。その瞳は真剣さを増していて、普段の表情では有り得ない真剣さだ。

「土砂崩れが起きれば、里や村に大きな被害が出る。人の命も沢山奪われるだけでなく、森の命も消えてしまう。互いに苦しみあうの

はご免だ」

「何とか食い止めねばなりませんね。昔から、人と森は私達に深く関わっています。互いに支え合って生きてきたのだから、何としても護らねば」

切灯乃は立ち上がって下に向けていた視線を上へと向ける。崙黎は木の上から飛び降り切灯乃に向き直る。

「まだ先の話だが、俺は一通り山のモノ達にこの事情を伝えて、山の頂上の方に避難できるように何とかする。お前らの社だってあるしな」

「では、私は早速和御堂様と宇城多摩様に話をして参ります。話の結果次第ですが、力のある者は食い止めの作業を手伝って貰う事になると思います」

「そうなるだろうな。ま、あとは宜しく頼むな。それじゃあ俺も行くわ」

そう言い、崙黎は木から木へとまるで猿の様に飛んでいく。その速さは尋常ではない。切灯乃はそれを見送った後、近道を通り社へと急ぎ足で向かった。

数分後。社へと着いた切灯乃は和御堂と宇城多摩のいる職務部屋へ足を進める。そして部屋の戸を手の甲で軽く叩き一礼してから中へと入る。書物に目を通していた二人は入ってきた切灯乃を見やり、

その表情の意味を捉えてか真剣な表情へと変わる。

「その様に急いで、何か治安を乱す様な事が御座いましたか？」

宇城多摩の問いに切灯乃は瞳を伏せて首を横に振る。そして後ろの戸を静かに閉めた後、二人の前で鎮座し表情を変えずに口を開いた。

「申し上げます。先程、様子見の最中に出くわした崙黎より森に異変がある事が分かりました。最近頻繁に起こる地震に伴い、今回の大雨で土砂崩れが起きる模様との話です。予想される被害の状況は大きく、下の里や山にも被害が及ぶそうです」

切灯乃が淡々と事情説明をしている間、二人はただそれを全て耳に入れていく。そして話が終わると同時に宇城多摩が口を開いた。

「何ということでしょう…免れそうにないではないですか。下の部落のモノ達には避難勧告を出さねば」

「心配は御無用です。既に崙黎が動いております」

それを聞いて和御堂は目を細めて笑う。

「あの者も役に立つ時は立つな。これで式を飛ばさずに済む」

そういつて真剣な表情に変え顎に手を添える。

「さて…問題は、被害の大きさ。里の半分が潰れるぐらい、と言ってもいいかもしれぬな。そうなれば我らが手を出さない訳にはいかなくなる。我の式だけで防げるくらいでもない。これは手伝って貰う必要がある」

「御心配には及びません。力のある者は作業を手伝って貰えるよう、

崙黎に伝えておきました」

「流石、私の妻だ。切灯乃」

和御堂は切灯乃に微笑めば、切灯乃は口元に笑みを浮かべ軽く頭を下げた。和御堂は立ち上がり懐から広げた扇子を取り出し、ぱちんと音を立てて閉じた。

「だが、それだけでは不十分… あれらと呼ぶとするか」

和御堂の口元に浮かべた笑みを見て、宇城多摩と切灯乃は瞳を伏せて静かに頭を下げた。

【参】鴉の御客人

崙黎の被害予測の日から二週間経ったある日の事。職務部屋の戸を開け、日を重ねるごとに怪しくなる空を眺めながら宇城多摩は息をついた。和御堂はそれを見てふっと口元を緩ませ宇城多摩に話しかけた。

「宇城多摩よ、そう焦っていてもいずれ雨は降るのだ。少しは落ち着け」

戸に手をかけたまま、宇城多摩は和御堂に振り返って苦笑して見せる。そしてその表情のまま答えた。

「そうは言われましても…あの森は私と私の仲間が管理する大切な森で御座います。焦らずにはいられません。それに…もし誰かの命が消えてしまったら」

宇城多摩の消え入りそうな声を遮って和御堂は口を開く。

「心配はいらん。我が誰かの命を落とす様な真似をして見せた事はない。それに、もしそうなる場合の為にあ奴を呼んだのだ」

その言葉に酷く申し訳なさそうに宇城多摩は微笑んだ。和御堂はそれを見て小さく笑い、止まっていた筆を動かした。

社の入り口に切灯乃は立って客人が来るのを待っていた。約十五分以上も入り口で立って待っている切灯乃に疲れは見えない。やがて社へと続く階段から足音が聞こえてきて切灯乃は無自覚に口元を緩めた。その者たちの姿が見えると、切灯乃は表に出て一礼し、その者たちは切灯乃の手前で止まった。

「ようこそお越し下さいました。色之葉様、羽生様」

その言葉に背の高い方は笑い、低い方は困ったように微笑んだ。二人とも黒髪で短髪、そして金色の眸。色之葉と羽生はどちらも二十代に見える。そういう外見と言うだけで、実際は人の寿命を遥かに超えていた。勿論、和御堂や崙黎もそうであるが。

「よお、久しぶりだな切灯乃。つつつても一ヶ月程前に来たばかりだな」

「本当ですよ色之葉様。いつもいつも和御堂様と切灯乃に迷惑をかけて…」

呆れたように半ば冷たい視線を色之葉に送る羽生。色之葉はうつと目線を逸らす。それに切灯乃は助け舟を出すかのように微笑んて言った。

「いえ、構いませんよ羽生。いつも賑やかになって楽しいですから」「あなたたちは嬉しいかもしれないけど…こっちは書類が溜まるばかりで困ってしまう」

はあ、と大きな溜息をつく羽生に悪そびれた感じもなく苦笑する色之葉。

「御話中ですが…中へと入りましょう。和御堂様がお待ちです」

切灯乃は二人に嬉しそうに微笑んで奥へ入るよう促した。二人はそれに頷いて中へと上がり案内する切灯乃の後ろについて行った。和御堂達のいる職務部屋の前まで来ると、切灯乃は戸の向こうへ話しかけた。

「和御堂様、色之葉様達がいらつしやいました」
「通せ」

その言葉に切灯乃は静かに戸を開け、色之葉達を中へと入れる。二人が中に入った後に、切灯乃も中に入り戸を閉めて和御堂の隣へと移動する。宇城多摩は湯呑に温かいお茶を淹れて二人の前に出して、自分も元の場所へと移動して座る。

「久しぶりだな、和御堂」

「何が久し振りだ。つい一ヶ月程前に来たばかりであろうが」

「そう言うな。社交辞令だと思って取ってくれ」

「阿呆か。さて…今日、お前を呼んだ理由は文を見て分かっておるな？」

他愛もない話から、和御堂は真剣な表情に変わり本題へと話の流れを変えた。色之葉もそれを見て真剣な瞳に変わり口端を吊り上げた。

「ああ。お前から文が来るなんて余程の事だからな。で、今回の雨の件についてだが…羽生」

「はい。我々は、楔山とその下の里周辺に結界を張る防御の役と、伝達の役を受け持ちます。後は主の力添えで空から雨の水量を減らします」

「雨の水量を減らす、とは…？」

宇城多摩の言葉に色之葉は自信気に答えた。

「大雨の流れを俺の羽根で吹き飛ばし進路を斎山へと変える。そして斎山に残る仲間達に海へと送って貰う」

色之葉の言葉にその場に暫しの沈黙が流れる。そして和御堂が口を開いた。

「色之葉…馬鹿の割には良く出来た考えだな」

「そつだろう！…ってそれ褒めてないだろ！？」

「気づいていなかったのか。流石馬鹿」

「馬鹿馬鹿嫌い！」

「でも、色之葉様の考えは素敵だと思いますよ。これなら土砂崩れも防げます」

口喧嘩を止める様に微笑んで言った切灯乃に、色之葉はニツと笑って見せる。だが、調子に乗るなというように羽生のチョップが頭に炸裂して、目頭に涙を浮かべて頭を抑える色之葉は羽生を涙目ながらに睨みつける。羽生はそれを受け流して和御堂に向き直る。

「ですが、主の力で進路を変える事が出来るかは分かりません」

「どういうことだ？」

「大雨がどれ位の強さになるかはわかりません。私がいうのもどうかと思いますが…確かに、主の力は和御堂様に次ぐ強さです。ですが自然の強さは変化しやすく、時として危険なものです。ですので」

それを遮るように和御堂が口端を吊り上げて笑った。

「心配するな羽生よ。我は色之葉に全てを託した覚えはない。いざとなったら我が色之葉を助けに行く。まあ、そんな事は有り得ぬと思うがな」

「当たり前だ。お前に助けてもらうなど屈辱だぞ」

色之葉は和御堂に鋭利な視線を向けたが、和御堂はそれに口端を吊り上げたまま返す。それを見た後、隣の羽生を見ながら言った。

「それから羽生。俺の事を信用しているならそんな事を言うな。そんなに信用できないか？」

「はい」

「…即答はないだろう」

色之葉は肩を落として頂垂れる。それをフォローするように切灯乃は言った。

「信頼関係が強いからこそ、そういう事が言えるのですよ色之葉様。そうでなければ、羽生が貴方様を心配したりなどしません」

「そうだな。切灯乃のいう通りだ」

和御堂は色之葉の肩を叩けば、色之葉はふわりと微笑んで顔を上げた。

「二人の言う通りだな…。でも一つ気に入らない事がある」

その言葉に和御堂と切灯乃、宇城多摩は顔を見合わせた。

「何故俺がお前に次ぐ強さなんだ。俺はお前より強い筈だぞ和御堂」
「…羽生に聞け」

和御堂は呆れたような視線を色之葉にやり目を伏せた。切灯乃と宇城多摩はこれから始まる口喧嘩を前に袖で口元を覆い笑いを堪える。そして大雨まで時は刻一刻と迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8000y/>

御狐物語

2011年11月27日11時47分発行